

## GUIDEBOOK 研究の方法

編者 日本科学者会議

リベルタ出版 2004年9月発行

216頁 ISBN 4-947637-92-7-C0036 1,600円

本書は、1998年に出版された「GUIDEBOOK 研究の世界」（リベルタ出版）の姉妹編である。前書では、1990年代になって大学院が大きく変貌していくなか、大学院や研究について原点に立ち返って考えた。その後、大学院はさらに大きく変わり、周知のとおり、国立大学の法人化が、大学における研究をとりまく環境の変化に拍車をかけている。急増する大学院生にもかかわらず、大学院において専門知識を身につけた人材にふさわしい活躍の場を保障できない現実に対して、将来に不安を感じる大学院生や、戸惑いを感じるや教員も多いと思われる。本書は、現役の大学院生を含む数名の研究者が執筆し、日本科学者会議が取りまとめた、大学院生のための研究生活のガイドブックである。

はじめの1章では、2年間で修士論文をまとめるということの主眼にして、なすべきこと、準備すべきことについて、大学院生へのアドバイスがまとめられている。章末の「2年間で修士論文をまとめるための11ヶ条」は、修士論文に留まらず、研究のあるべき姿を平易な表現でまとめた名文である。我々も、是非初心に帰って再確認したい事項である。

2章は、大学院生である筆者が、大学院生が抱えている悩みを多面的に取り上げている。研究で忙しい大学院生は、研究や人間関係等で悩みを抱えても、自分だけの問題として捉えがちである。自分の悩みが一人だけのものではなく、多くの大学院生に共通した問題であることを知ることは、解決の糸口を見出すために大切であろう。こうした悩みを抱える大学院生が増えていることを大学側も認識し、学生支援についての改善に取り組むべき問題でもある。

3章では、自然科学に即して、科学と研究について考察している。自分がかかわっている科学研究について、科学の発展の歴史と照らし合わせて考えてみることは大切である。また4章では、修士論文等の論文をまとめるための具体的な方法論を取り上げている。自己流に陥らないように、自分の方法を再確認することは有益であろう。創造的研究について、ノーベル賞受賞者の研究による考察は、とてもわかりやすい。

5章は、研究と社会とのかかわりについて、大学のあ

るべき姿に焦点を当てながら論じている。「大学の自治」の意味と役割がわかりやすく解説され、科学の発展に対して、大学院生の役割、研究者のあるべき姿が示されている。なお、この5章は、本学会とも関連の深い岩田進午氏の執筆である。

さらに、各分野の若い研究者による研究の歩みが7編の「体験的研究方法論」として収録されている。それぞれの大学院生時代の苦労話がかかれており、悪戦苦闘中の大学院生にとって参考になる話も多い。

本書は大学院生へのガイドブックとして取りまとめられているが、長年、研究・教育に取り組んできた筆者らの、急速に変化する我が国の研究・教育に対する警鐘でもある。どの章から読んでもよい構成で、とても読みやすく書かれているが、著者からのメッセージにはいろいろ考えさせられる。目に付くところをいくつか書き出してみたい。

「徹底した市場の論理と効率性を追及する新自由主義イデオロギーの影響のもとで、日本社会には「競争」を煽り立てる風潮が蔓延している。(p. 15)」「大学とは本来無縁な競争・効率・管理の3Kがのし歩くようになっている。(p. 16)」「研究に必要な広い視野のなかから自分の研究対象にむけて焦点を絞り込む能力を養うことが重要。(p. 93)」「単に広く受身の知識欲だけでなく、深く鋭い洞察力を養える能動性をもって視野を広める必要がある。(p. 93)」「いま急速に導入されようとする我が国の産学官連携は、大学に「競争」と「効率」という企業経営の論理を持ち込もうとするかみえ、「学問の自由・大学の自治」の主張は改革反対の隠れみののだというような雰囲気すらある。(p. 149)」「大学院生に、自分の専門分野のみでなく、その関連分野についての知識が幅広く身につけられるような機会が与えられることが大切。(p. 198)」「全体の研究の流れのなかで、産学協同研究をバランスよく位置づけることが大切。(p. 198)」

現在、誰にも止められないかのごとく、そしてあたかも当然進むべき道として進行する大学における変革のなか、改めて考えるべき視点ばかりである。自分自身の大学院生活、またその後のポストドクター時代を振り返ると、無駄は多かった気もするけれども、自分のやりたい

ことに時間を費やしていたと思う。今になってみると、それらが財産になっている。現在の多くの大学院生は、いろいろな場面で業績リストを求められ、いつも追い立てられているように感じられる。特に若い時期において、質を保ちながら論文を増産することは至難の業である。

私個人は、大学院生と共に考え、試行錯誤をくり返す研究形態は、非効率な作業ではあるが、自分自身の次世代への唯一の貢献と感じている。小さな進歩に対する喜

びを、若い大学院生と共有できることは、この上なくうれしい出来事である。この大学における良き伝統を消してはならないと思う。我が国の研究と教育が大きな曲がり角に差し掛かっている今、本書のメッセージを真剣に受け止め、皆でさらに議論を深めていく必要がある。

取出伸夫 (三重大学生物資源学部)

受稿年月日: 2005年 1月 31日

受理年月日: 2005年 1月 31日